

Current and Future Studies of Hideo Kobayashi: “Discourse, Thought, Expression, War and Mourning”

YAMAMOTO Hayato

This paper summarizes recent studies and critical evaluations of Kobayashi Hideo (1902-1983), and presents new challenges and prospects for future research on this important literary critic.

In 2001-2002, Shinchosha published a 16-volume edition of *The Complete Works of Hideo Kobayashi* to commemorate the centennial of Kobayashi's birth. Since then, additional popular versions of *The Complete Works* have been published (2002-2005), and new critical studies and evaluations of Kobayashi have flourished, sparking renewed debate about his work. In this context, there is a growing momentum to reconsider and update the image of Kobayashi as a writer who has been privileged as the “founder of modern criticism” and to reexamine the potential of critical discourse on his work.

This paper outlines the specific achievements of these efforts based on the four keywords, “discourse,” “thought,” “expression,” and “war.” Finally, I will focus on the formation of the theme of “mourning” in Kobayashi's work, and present a new critical perspective that examines its connection to the poetic language that underpins Kobayashi's critical writings.

小林秀雄研究の現在と未来

— 言説・思想・表現・戦争・哀悼 —

山本 勇人 YAMAMOTO Hayato

はじめに

本稿は、文藝批評家・小林秀雄（一九〇二—一九八三）に関する評価・研究のうち、二〇〇一年から現在に至る約二十年間を主な対象として整理、解説し、今後の研究展望を示すものである。¹⁾

二〇〇一年から翌〇二年にかけて、新潮社は、作家の生誕百周年を記念し、発表年順に作品を配列した『小林秀雄全集』全十六巻（内、別巻二巻。補巻三巻、二〇一〇）を刊行、次いで〇二年から〇五年の間には、同全集の増補普及版として『小林秀雄全作品』全三二巻が出版された。両全集（第五・六次全集²⁾）には、小林自身が没後一切の全集類への収録を禁じた、未完のベルクソン論「感想」（『新潮』一九五八・五一—一九六三・六）をはじめ、これまで作者の関与した作品集には未収録であった複数の作品が収められ、その六十余年にわたる文業の俯瞰が可能となった。作品の文庫版も相次いで改版され、主要な作品の殆どが容易に手に取れるようになり、加えて、『新潮CD 小林秀雄講演』全八巻（二〇〇四—二〇一〇）³⁾によって、著者晩年の「声」と「語り口」が再生される。こうした出版環境は、主に文藝雑誌を舞台とする「小林秀雄ブーム」（『研究動向 小林秀雄』

『昭和文学研究』二〇一六・三）を牽引し、新たな評価の言葉を続々と登場させた。小林を主題とする学術書も、複数世に問われる。細谷博『小林秀雄論—〈孤独〉から〈無私〉へ〉（おうふう、二〇〇二）、榎原修『小林秀雄—批評という方法〉（洋々社、二〇〇二）、石川則夫『文学言語の探究』（笠間書院、二〇一〇）、井上明芳『文学表象論・序説』（翰林書房、二〇一三）綾目広治『小林秀雄—思想史のなかの批評』（アーツアンドクラフツ、二〇二二）などである。

以上の潮流においては、一見して、「現代文学最初の文藝評論家」（川端康成「小林秀雄著『文藝評論』」『読売新聞』一九三二・八・六）、「近代批評の創造」主体（ドナルド・キーン『日本文学の歴史18』角地幸男訳、中央公論社、一九九七）としての小林秀雄像が再生産され、文学史上の地位はますます堅固なものとなってゆかみえる。だが、実際の研究動向には、規範的な読解を乗り越え、より立体的な作家・作品のすがたを見出そうとする傾向が伺える。第五次全集刊行を受けて行われた、山城むつみ・鎌田哲哉・大杉重男の鼎談「小林秀雄を批評する」（『週刊読書人』二〇〇一・四・二七）では、新全集について、座談会記録など未収の文献が複数存在すること、収録された作品についても初出版と現行版との校異、すなわち、作者による「削除推敲」の「過程」が示されないことへの批判的な言及（鎌田）がなされた。その上で、「様々なる意匠」（『改造』一九二九・九）から「本居宜長」（『新潮』一九六五・六一—一九七六・二二）に至る小林の批評が、単なる「直感」主義ではなく、「理論」を手放さずに「信」を問い続けた探究の軌跡（山城）として捉え直される。また、「近代絵画」（『新潮』一九六五・六一—一九七六・二二）『藝術新潮』一九五六・一一—一九五八・二二）をはじめ、小林の美術批評を対象に先進的な研究を展開する鈴木美穂は、小林の「〈人格化〉」正典化のメカニズムを分析することは、アジア・太平洋戦争敗戦後の文学・文化生成および『文学史』の枠組み構築の過程解明に繋がる重要な研究課題であると記した（『小林秀雄と初期『藝術新潮』』『目白国文』二〇一五・二二）。大澤聡『批評メディア論—戦前期日本の論壇と文壇』（岩波書店、二〇一五）は、「言論や批評を発表形態の物質性において捉えかえす」「言論の存在論」を掲げ、知のネットワークの一点として小林を論じている。

加えてこの間、江藤淳『小林秀雄』（講談社、一九六一）に連なる、新たな精神史的評価も編まれた。若松英輔『小林秀雄—美しい花』（文藝春秋、二〇一七）、

大澤信亮「小林秀雄」(『新潮』二〇一三・七・連載中)の二篇である。若松は、小林の文学を「聖なるものへの衝動」とする視座から、作家の「見神」や「信仰」、「悲しみ」の用語を紐解き、また、武者小路実篤、堀辰雄、中野重治ら、同時代の表現者との文学的邂逅・乖離の内実に分け入った。他方で大澤は、劈頭、海外の小林研究の希薄さと国内の膨大な言及、「内と外の奇妙なギャップ」を瞥見し、江藤淳、吉本隆明、柄谷行人らが一様に批判した、小林の論理的閉鎖性、他者の不在の問題を再審する。「すでに無数の小林論が書かれた後で、今、小林秀雄について語るためには、根本的な態度の変更が必要」であり、それは、小林の批評が「たしかに間違いなく、外を求めて、いる」(『小林秀雄序論—日本の批評』『新潮』二〇一三・四)という信憑と共に始まる。

小林秀雄を「現在」において読むことの意味を考えるために、読者は、彼の批評テクストに内在する(外部)への指標を見定めなくてはならない。本稿では、「言説」(思想)〈表現〉(戦争)〈哀悼〉の五つのキーワードに基づき、新たな研究史を構想する。

一、〈言説〉

作品から作者へ、そして「作者の死」(ロラン・バルト)によって前景化された対象としてのテクストから、個別の地域性や具体的な歴史性を問題とする(言説)への転回という、日本近代文学研究史上の問題機制の変遷は、小林秀雄研究の領域においても、少なからず共有されてきたといえる。ただし、一九七〇—八〇年代に、「構造主義」「フォルマリズム」の隆盛が研究に新機軸を与えたものの(『明治・大正・昭和作家研究大事典』桜楓社、一九九二)、表現論的方法が十分に検討されることのないまま、言説研究への移行がなされた向きがある。この論件は第三節で扱い、まずは、言説研究の主要な成果を列挙する。

山本亮介「小林秀雄の一断面—エンゲルス『自然弁証法』受容の周辺」(『日本近代文学』二〇〇五・一〇)は、「アシルと亀の子IV」(『文藝春秋』一九三〇・七)、「マルクスの悟達」(同、一九三一・一)など、初期文藝時評における言語論、批評理論の受容に迫った。岡田浩行「小林秀雄の〈絶対言語〉論」(『日本近代文学』二〇一〇・一一)は、同時期、広く読まれたフィードラー『芸術的活動の起源』(金

田廉訳、一九二二)による言語論的影響を解き明かした。若松伸哉「小林秀雄『おふえりや遺文』に関する一考察」(『緑岡詞林』二〇〇一・三)は、大正—昭和期の『ハムレット』受容、とくに「知識人」に接続される「ハムレット型」の人物造型を手がかりに、小説「おふえりや遺文」(『改造』一九三一・一一)の「批評」的戦略を読みとった。藤井貴志「芥川龍之介—不安—の諸相と美学イデオロギー」(笠間書院、二〇一〇)は、「現代文学の不安」(『改造』一九三二・六)と「故郷を失った文学」(『文藝春秋』一九三三・五)に表出された〈不安〉の位相を分析し、そこに底流する芥川龍之介からの思想的影響と離反とを看取した。大原祐治「歴史小説の死産」(『文学的記憶』一九四〇年前後)翰林書房、二〇〇六)は、日中戦争期における「歴史」言説の検証を通し、「歴史について」(『ドストエフスキイの生活』一九三九・五)以下の諸論における、「行為遂行的」な歴史理解の特異性を論じた。また、仁平政人「十五年戦争期の日本における「歴史」の思考とベネデット・クロロチエ」(『日本学研究』二〇二〇・九)は、その要諦を、「歴史と生の不可分なつながりを強調する」クロロチエ『歴史叙述の理論と歴史』(羽仁五郎訳、一九二六)の「読み替え」の産物とみて、戦後の言説に続く連続性を追跡する。多田蔵人「小林秀雄「実朝」論」(『アジア遊学』勉誠出版、二〇一九)は、戦時下のエッセー「実朝」(『文學界』一九四三・二、五—六)の生成に焦点を当て、「金槐集」の文献学的な位置および解釈の変容をたどることで、斎藤茂吉や佐佐木信綱らの史料研究を横目に、「新しく精緻な言葉の構造」を創出した小林の方法を露出させた。山根龍一「架橋する言葉—坂口安吾と時代精神」(翰林書房、二〇二一)は、戦時下から敗戦直後へ至る過程での、小林と坂口安吾、『近代文学』同人の応酬から、戦争表象と文学者の関係を可視化した。ほかに、大正期の生命主義思潮を背景に、初期批評群の用語を検討した「教育論の中の大正生命主義—小林秀雄と芸術教育論」(『文学部論集』二〇〇一・三)など、有田和臣の一連の研究がある。

今後の研究課題のひとつに、新たな資料の発見とその活用が挙げられる。現在利用可能な資料として、最晩年の蔵書を収めた、成城学園教育研究所「小林秀雄文庫」がある。権田和士『言葉と他者』(青簡舎、二〇一三)所載の「換骨される典拠—『本居宣長』の材源と論理」は、同文庫の資料を利用し、「本居宣長」執筆時に小林が参照した複数の文献の「傍線等の書き込み」、研究の「形跡」を

たどり、本文を構成する「論理」を浮上させた。権田の言う「作品の形成過程や推敲過程を明らかにし、その背後にある作者の判断や思考の、揺れや変容を実証的・論理的に掘り起こしてゆく」作業は（「小林秀雄」『近代文学草稿・原稿研究事典』八木書店、二〇一五）、来たるべき新たな個人全集の編纂においても必要不可欠となろう。

二、〈思想〉

古くは、丸山眞男「近代日本の思想と文学」（『岩波講座 日本文学史』一九五九）がその「論理的構造」と「抽象的」「社会」の観念（傍点原文）の欠如を指摘して以来、小林秀雄に関する議論は、日本文学研究のみならず、思想史研究の領域においても重ねられてきた。

荻部直・片岡龍編『日本思想史ハンドブック』（新書館、二〇〇八）には、「十九世紀のフランスの批判精神によって自意識の問題を突き詰め」、「関東大震災後の知的空間」の中で「唯物史観的思想史」と対決した「思想史家」として、その業績が紹介される。小林の思想を、大正期に醸成された「生活」の中に文化的意味を求めめる傾向」の延長線上に据え、「彼にとって日本の真の知識人とは、生活事実を率直に受け入れ、その経験のもたらす感動を意識化する存在であった」とする解説は、簡潔ながら重要である。先崎彰容・浜崎洋介『近代日本の思想と批評—アフター・モダニティ』（北樹出版、二〇一四）所載の浜崎論文は、こうした認識を深化させ、第一世界大戦後の西欧思想、関東大震災後の思潮変容を整理し、近代的主体を取り巻く「危機」のなかに胎動する「批評」の精神史を描き出した。

小林の思想との果敢な格闘を演じた論考も少なくない。桂秀実「小林秀雄における講座派的文学史の誕生」（『天皇制の隠語』航思社、二〇一四）は、「私小説論」（『経済往来』一九三五・五一八）の文学史観と、同論考の発表年に起きた日本資本主義論争との関係を論じ、「講座派理論の受容」横領を経て、小林の内部に「天皇制」を包摂する「市民社会論」が成立したことを推定した。山崎正純「〈中国〉を迂回する日本の近代」（『戦後（在日）文学論—アジア論批評の射程』洋々社、二〇〇三）は、「十五年戦争下の『中国』言説」に焦点を当て、保田與重郎、高

山岩男のそれと共に、小林における「中国」への眼差しを剔抉する。金杭^{キョウカン}『帝国日本の闘—生と死のはざまに見る』（岩波書店、二〇一〇）は、戦時下の植民地朝鮮において「朝鮮人」が「日本人になる」という「決断」を可能にした制度と論理を立証しながら、「日本人である」という条件の下に「歴史」の確実性と際会した小林の方法論的瑕疵を衝いた。ほかに、「文学者の戦争責任」問題を端緒に、戦後社会において幾度も賦活される小林秀雄の「神話」と、それを「可能とした条件と限界」を質し、異なる〈文学史〉の可能性を探った、長濱一眞「文学」まで—日本近代批評の開祖 小林秀雄」（『子午線』二〇一五・四）などが挙げられる。

岩本真一『超克の思想』（水声社、二〇〇八）は、戦時下の座談会「近代の超克」（『文學界』一九四二・九—一〇）から、「日本に固有の原理」をもって「日本」近代」の行き詰まりを打開し、同時に、限界に直面している西欧近代を批判「超克」しようとする心性を抽出し、その「批判的継承」として、「近代」の「確立」と「超克」という、二重化された問題に取り組んだ。橋川文三『増補 日本浪漫派批判序説』（未來社、一九六五）に代表される戦後の思想史研究を基に採用されるのは、「芸芸批評」を「思想史」精神史」展開の〈場〉と捉え、個別の批評家の「思想形成」に着目する方法である。小林秀雄、中村光夫、福田恆存、それぞれの思索を資料史料に即して再構成する本書は、「内在」的読解によって彼らの生きた問題圏を上げ、われわれがまだその渦中にある〈近代〉を徹底して問い直す構えを示している。

三、〈表現〉

中村光夫は、かつて小林秀雄を「詩人としての資質の持ち主が、散文自己表現の道を見出した」書き手として論じた（『小林秀雄論』『文學界』一九五八・五一七）。この指摘は、現在の小林研究において十全に汲み尽くされていない、ひとつの方法論的可能性を指し示しているように思われる。それは、小林の批評テキストの、「表現」の特殊性を分析する方法である。

従来の研究史においても、小林の文学は、しばしば近代詩、昭和詩との関わりの上に検討されてきた。堀内達夫「小林秀雄参考文献雑感」（『ユリイカ』

一九七四・一〇）が「昭和詩との関連を正面に押し出した考察」として例示した、安東次男『現代詩の展開』（思潮社、一九六五）、大岡信『蕩児の家系』（思潮社、一九六九）がそれであり、また、小林の初期の詩論や小説が「昭和詩の系譜」の上に解釈しうることを強調した、北川透『詩神と宿命』（小沢書店、一九八二）も重要である。ただ、そもそも中村光夫の所説において、小林の批評のいかなる部分に「詩」を見出しうるか、という問いは突き詰められなかった。永原孝道『死の骨董』（以文社、二〇〇三）は、エッセー「戦争と平和」（『文學界』一九四二・三）の評価をめぐって、「誰もが口にする「詩的」という言葉は、一体何なのだろう。詩とは何か。「詩的」であるとはどういうことか。『戦争と平和』が一つの散文詩たり得ているとすれば」、それは「時局便乗の腐臭を放つ他の美的駄文と、どこが違うのか」と直截に問いかける。福田拓也『小林秀雄 骨と死骸の歌―ボードレールの詩を巡って』（水声社、二〇一五）は、「批評活動の展開」に関して平野謙らの主張した、「自意識から社会的意識、そして日本の古典への三段階の移行」説に異を唱え、その構図を内破するようにして現出する「ボードレー尔的「死骸」の形象」、「骨や死骸の代替的形象の連鎖」を指定、ヘーゲル現象学を補助線として、『悪の華』一面（『仏蘭西文学研究』一九二七・一）を論じた。これらの試行の先には、小林の詩的言語に対する、より多様なアプローチが望まれる。

その際、考察の契機となるのは、周辺作家との「関係」を再考することだろう。中原中也の生誕百年にあたる二〇〇七年には、中原中也記念館で特別企画展「小林秀雄と中原中也」が催され（七・二五―九・二四）、二人の詩篇や評論、書簡とともに、その軌跡が回顧された（関連討議などは『中原中也研究』二〇〇八・八を参照）。『現代詩手帖』（二〇〇七・四）特集号巻頭を飾った、中村稔「中原中也と小林秀雄」は、「中原中也の思ひ出」（『文藝』一九四九・八）に導かれ、両者の「思想的な親近性、紐帯」を探究する。加えて、横光利一文学会は、第一九回研究集会（二〇一九・八・三二）として「ラウンドテーブル 横光利一と小林秀雄」を開催した。初期の「断片十二」（『青銅時代』一九二四・一〇）以来続く、小林の横光に向けた関心を吟味し、両者が並走、共鳴した「戦間・戦中期」を中心に、その「関係性」が「さまざまな角度から再検証」（田口律男「横光利一と小林秀雄」にかんする覚書）『横光利一研究』二〇二〇・三）され、多彩な議論が交

わされた（同前書参照）。こうした作家間の言説・表現上での相互浸透や差異に目を向けることで、小林研究における表現論の領域を拡張しうるのではないか。

狭義の文学の枠を超え、小林が関わったさまざまな媒体とその特性、それらが彼の批評言語に及ぼした作用・反作用をみることも、有効な手法であろう。北野圭介「小林秀雄におけるメディア理解について」（『美学芸術学論集』二〇一四・三）は、小林の映画論、写真論に関して「表現媒体に関わる問いの観点からの考察は散発的」と指摘し、「映画批評について」（『日本映画』一九三九・三）や「死体写真或は死体について」（『作品』一九四九・三）などの言説に、メディア論的研究の可能性を探った。宇野邦一「無意識・映画・存在論」（『反歴史論』せりか書房、二〇〇三）は、一九三六年のベルリンオリンピック記録映画『オリンピア』（一九三八）の鑑賞体験を綴ったエッセー「オリンピア」（『文藝春秋』一九四〇・八）を中心に論じ、小林が「映画」という媒体を「思考を脅かすもの」と見なしながら、一義的な「批判」を避け、「ある未知の位置」に置き続けたと小括する。松原知生「物質（化）への情熱」（『物数奇考―骨董と葛藤』平凡社、二〇一四）は、小林の骨董体験が「文章表現のみならず、芸術や歴史一般をめぐる」「思考そのものの醸成と連動する」とみて、クロノロジカルな時間概念を攪乱する「断片的」な骨董観を精緻に分析した。安智史「萩原朔太郎と小林秀雄をめぐる一断面」（『國文学』二〇〇〇・一）は、小林の音楽・音響論を讀解し、「複製技術」を自身の文化体験の前提と認めながら（『ゴッホの手紙』『文体』一九四八・二二、一九四九・七／『藝術新潮』一九五二・一―一九五二・二）、「声の複製メディア」としての「ラジオ」から流れる「レコード歌謡」を、「低劣な流行小歌」（『モーツァルト』『創元』一九四六・一一）として閑却した理路の矛盾を指摘、「純粋な音楽記号、絵画記号」への指向を、宣長論における「国語」偏重の姿勢と結びつけた。

四、〈戦争〉

近年、戦時下の『満洲新聞』に掲載された講演録「歴史に就いて」（一九三八・一・二九―二・三）、「事変の新しさ」（一九四〇・八・二七―八・三一）、エッセー「北京だより」（一九三八・一・二九）が発見、再録され（『すばる』二〇一五・二）、

西田勝「小林秀雄と『満洲国』」(同前)がその背景を解説している。杉野要吉編『交争する中国文学と日本文学』(三元社、二〇〇〇)には、一九四四年二月に華北作家協会が主催した座談会記録(『中国統一文学団体を組織することに関する座談会』李仁順・杉野元子訳)が収められ、小林の発言も確認できる(同書所載の井上賢一郎「中国における小林秀雄」も参照)。これら新資料が読者にもたらず新たな視角を含め、戦時下の小林を再び切開する必要があると生じる。

磯貝英夫「戦争体験とその位置」(『解釈と鑑賞』一九七六・一〇)をはじめ、過去にも有力な研究は存在したが、この間、新たな問題構成のもとに、小林と「戦争」との関係捉え直す論考が複数登場した。森本淳生『小林秀雄の論理―美と戦争』(人文書院、二〇〇二)は、「外在的」なイデオロギー批判の論調はもとより、江藤淳、桶谷秀昭、栗津則雄、前田英樹らの優れた「内在的読解」の系譜もまた、この問題を正面から問わなかったと指摘し、「政治問題に還元」することなく、「作家の営為を政治的かつ文学的に問題にしなければならない」と主張する。テクストの論理的展開を跡付ける本書は、小林の「表現」が、現実存在の表象⇨代理(representation)を棄却し、「表現産出性」と呼ばれる理念型に至るまでの変容を描き出す。それは、近代主義者の思考が次第に「曖昧さ」を帯び、(政治の美学化)へ傾斜する過程とも言えるが、森本はこの問題を「文学」が「かつてない以上に政治と混淆し、またそれに利用されている」「われわれ」の問いとして引き受けている。

同じく〈戦争〉を経た小林の内的変容をたどったのは、山城むつみ『小林秀雄とその戦争の時』(新潮社、二〇一四)である。山城の関心は、戦前―戦後を貫く小林のドストエフスキー研究を介して、戦中の「従軍記」とりわけ『文藝春秋』一九三八年六月号掲載時、「慰安所」に関する記述が内務省の検閲基準に抵触した「蘇州」へと向かう。本書は、分割還付によって毀損された当該誌面を部分的に復元した、陸艶(リキエ)「小林秀雄『蘇州』をめぐる」(『佛教大学院紀要 文学研究科編』二〇一二・三)の成果を取り入れ、さらに仔細な検討を加えることで、「資料」の可能性をあぶり出した。ただし山城は、資料の「欠損がすべて復元されたら、それが抱えて、こんでいる、空白も埋められるというわけではない」とも述べる。五味渕典嗣「中国の小林秀雄」(『プロパガンダの文学―日中戦争下の表現者たち』共和国、二〇一八)は、森本、山城の論を評価しつつ、言説研究的な視

野の不足を指摘し、小林の「従軍記」と、火野葦平の「麦と兵隊」(『改造』一九三八・七)をはじめとする小説との間に生じた相互作用的な動態を論じた。

これらに共通するのは、小林の〈戦争〉、日中―太平洋戦争下の体験と思考を、「現在」の時況の上に読み替えるという問題意識である。森本淳生は「小林秀雄の現代性は、彼のテクストにポリフォニックな多元性を見出し、彼が戦時期にたどったのは別の道、感知するわれわれの側の批評性なしに現れてこない」(「もう一つの道―小林秀雄の現代性」『文学界』二〇〇八・三)と総括した。

五、〈哀悼〉

最後に、筆者の構想する小林秀雄論の課題について、簡略な記述を試みる。

本稿が駆け足で通過した約二十年の間、内外に起きた数多の事件、事故、紛争、自然災害、疫病の経験がわれわれに投じたのは、(死者)との関係めぐる問いであったといえる。二〇一一年三月十一日の東日本大震災を契機に執筆された、いとうせいこう「想像ラジオ」(『文藝』二〇一三・一)は語りかける。「聴こえてくるのは陽気さを装った言葉はつかりだよ」「死者を吊って遠ざけてそれを猛スピードで忘れようとしている」「亡くなった人はこの世にいない。すぐに忘れて自分の人生を生きるべきだ」という声もある。「でも、本当にそれだけが正しい道だろうか。亡くなった人の声に時間をかけて耳を傾けて悲しんで悼んで、同時に少しずつ前に歩くんじゃないのか。死者と共に」。この死者たちからの呼びかけに応答する契機を、いまこそ小林秀雄の言葉に見いだすことはできないだろうか。

若松英輔「震災と死者の詩学」(『新潮』二〇一一・一〇)は、「震災の問題は、死者を包含する論理が提示されないかぎり、終結するどころか、始まらない」と述べ、小林の文学を「死者論」として読み直すことを提起する。柳瀬善治「二十一世紀の小林秀雄」にむけて(『国文学攷』二〇一六・三)は、小林の批評に、「三・一一以後の文学への問い―未来の死者⇨他者をどのように表象すべきか」に対する「応答可能性」を求め、ドストエフスキー論「白痴」についてⅡ(『中央公論』一九五二・五一―一九五三・一)の中に、「過去の情動」と「未来への視座」の結合を見出した。こうした読解、あるいは読解の対象となる小林の諸作は、時として「死者を仲立ち」とする「生の矮小化」、「死の審美主義」を招くものとみなされ

る（坪井秀人『二十世紀日本語詩を思い出す』思潮社、二〇二〇）。だが、われわれが考察すべきはむしろ、小林秀雄がみずからを「死んだ奴が生き返るかも知れぬ様な不思議な生活」に身を捧ぐ「藝術家」（坂口安吾との対談「伝統と反逆」『作品』一九四八・八）と同等するに至った過程であり、〈死者〉を表象する「藝術」の可能性である。

大江健三郎『ピンチランナー調書』（新潮社、一九七六）もまた、「死について考えている人間」として、この批評家の名を挙げていた。「ベルグソンの研究を、母親が死んだ日に踵にまといつくようにして飛んだ大きいホタルの話から、小林秀雄が始めていたろう?」。「感想」第一回（『新潮』一九五八・五）冒頭、小林は「母が死んだ数日後」の夜に起きた、奇妙な体験を記す。

門を出ると、行手に螢が一匹飛んでゐるのを見た。「……」おつかさんは、今は螢になつてゐる、と私はふと思つた。

書き手は「私は事実を正確には書いてゐない」と、すぐさま先の叙述を打ち消し、「門を出ると、おつかさんといふ螢が飛んでゐた」と言い換える。だが、なおも文意は明らかといえない。「螢」と化した「母」の存在―非在をめぐつて、テクストは言い淀み、反復し、言葉を取り違える。まるで、村上春樹の短篇小説「螢」（『中央公論』一九八三・一）の中で、恋人を亡くした「彼女」が、「上手くしゃべれないのよ」と言い、「見当ちがい」な言葉を「訂正しよう」とすると、もつと余計に混乱して見当ちがいに「なると吐露した場面のように。ここには、かけがえなき存在の死によって引き起こされた／にまつわる言語表現の不可能性と、それでもなお、喪われた存在を再―現前化しようとする意思との葛藤があらわれている。「あの経験が私に対して過ぎ去るのだらう」。小林は、超越論的な問いを携えながら、「感想」を遂絶し、「本居宣長」の連載へと向かう。

しかし、〈死者〉の表象をめぐる問題は、より早くに準備されていたのではなにか。一九二二年、小林が一九歳の時、父・豊造が急病に倒れ、還らぬ人となつた。その文学的な出発の時期に行動を共にした富永太郎は二五年に「この世を去り、中原中也もまた三七年に夭折する。『文學界』同人・島木健作は四五五年の敗戦直

後に逝去し、母・精子の死は翌四六年である。偶然ながら、小林の作家としての成熟の過程は、理解者、同伴者との離別の過程でもあった。個人史を離れても、戦争と革命の世紀が、膨大な「死」と共にあったことは言をまたない。その中で小林は、時に死者の記憶に関する言葉を編み、時にその言葉を書き換えてゆく。「富永が死んだ年、僕は彼を悼む文章を書いたが、今それを読んで、当時は確かに僕の裡に生きてゐた様々な觀念が、既に今は死んで了つてある事を確めた。そして、自分は当時、本当に富永の死を悼んでゐたのだらうか、といふ答へのない疑問に苦しむ」（『富永太郎の思ひ出』『富永太郎詩集』筑摩書房、一九四一）。だから、「記憶するだけではないけない」、「上手に思ひ出」さなくてはならない（「無常といふ事」『文學界』一九四二・六）。死者の微かな痕跡をもとに、その記憶が新たに編み直されるとき、批評言語のなから、〈哀悼〉の詩語があらわれる。〈哀悼〉は、死を齎す〈戦争〉という出来事と同時代の〈言説〉とのあいだで生成された小林の〈思想〉と〈表現〉をたどる上で、一貫して重要なタームであると思われ。

死者は去るのではない。還つて来ないのだ。と言ふのは、死者は、生者に烈しい悲しみを遺さなければ、この世を去る事が出来ない、といふ意味だ。それは、死といふ言葉と一緒に生れて来たと言つてもよいほど、この上なく尋常な死の意味である。（『本居宣長』第五十章）

閉塞した「現在」を生きるわれわれが、新たな「詩」と「批評」の言葉を案出するために、いま再び、小林秀雄のテクストを紐解き、その思考を〈外部〉へと押し拡げてゆくことを目指したい。

〔附記〕小林秀雄の作品の引用は初出に拠り、適宜、第五次『全集』を参照した。原則として旧字は新字に改めた。引用文の傍点は、断りのない場合引用者による。紙幅の都合上、一部文献の副題を省略した。

(1) 従来の「小林秀雄研究史」としては、以下の文献を参照のこと。

- ・平岡敏夫「小林秀雄研究史」(『解釈と鑑賞』一九六一・一二)
 - ・吉田熙生「小林秀雄研究史」(『近代文学鑑賞講座 小林秀雄』角川書店、一九六六)
 - ・中村完「小林秀雄」(『日本近代文学研究必携』学燈社、一九七七)
 - ・榎原修「研究動向 小林秀雄」(『昭和文学研究』一九七九・一二)
 - ・清水孝純「小林秀雄研究案内」(『鑑賞 日本現代文学 小林秀雄』角川書店、一九八二)
 - ・吉田熙生編、伊中悦子、榎原修、関谷一郎、根岸泰子「作品別 小林秀雄研究史」(『別冊 國文学 小林秀雄必携』学燈社、一九八三)
 - ・榎原修「小林秀雄研究史私観」(『二冊の講座 小林秀雄』有精堂、一九八四)
 - ・清水孝純「小林秀雄」(『明治・大正・昭和作家研究大事典』桜楓社、一九九二)
 - ・有田和臣「研究動向 小林秀雄」(『昭和文学研究』一九九五・七)
 - ・石川則夫「研究動向 小林秀雄」(『昭和文学研究』二〇一六・三)
- (2) 第一―四次の『全集』書誌は以下の通り。
- ・『小林秀雄全集』全八巻(創元社、一九五〇―一九五一)
 - ・『小林秀雄全集』全八巻(新潮社、一九五五―一九五七)
 - ・『小林秀雄全集』全二二巻(新潮社、一九六七―一九六八。補巻一巻、一九七九)
 - ・『新訂 小林秀雄全集』全二二巻・別巻三巻(新潮社、一九七八―一九七九)

(3) 第一―五巻は『新潮カセット文庫 小林秀雄講演』(一九八七―一九九〇)の音源を再利用、第六巻「音楽について」、第七巻「ゴッホについて/白鳥の精神」、第八巻「宣長の学問/勾玉のかたち」は、新たに公開された音源である。

(4) 第五・六次全集刊行以降の雑誌特集号は以下の通り。

- ・『新潮』「臨時増刊 小林秀雄 百年のヒント」(二〇〇一・四)
- ・『ユリイカ』「特集 小林秀雄」(二〇〇一・六)
- ・『Library ichiko』「特集 小林秀雄」(二〇〇一・七)
- ・『文藝別冊』「特集 封印を解かれた小林秀雄」(二〇〇二・九)
- ・『文藝別冊』「総特集 小林秀雄、はじめての/来るべき読者のために」(二〇〇三・八)
- ・『文学界』「特集 小林秀雄 没後四半世紀」(二〇〇八・三)
- ・『別冊太陽 小林秀雄』(二〇〇九・一一)
- ・『芸術新潮』「大特集 小林秀雄 美を見つめ続けた巨人」(二〇一三・二)
- ・『新潮』「没後三〇年特集 2013年の小林秀雄」(二〇一三・四)

・『考える人』「特集 小林秀雄、最後の日々」(二〇一三・四)

(5) 吉本隆明は次のように書いた。「小林秀雄の劇には関係の意識が不足していた。また対象化の能力を欠いていた。いつも他者との関係に躓くし、また明晰がないために他者との関係を保ちながら自意識の果てまで探索をつづけるといふ二重性をもつことができない」(『小林秀雄』『悲劇の解説』筑摩書房、一九八五)。

(6) 青柳恵介「教育研究所にて保管している『小林秀雄文庫』について」(『成城国文学』二〇〇四・三)に、同文庫成立の経緯が報告されている。

(7) たとえば、吉岡洋「死者のまなざしの中にみずから置くこと」(『アルテス』二〇一一年・二)を参照。

(8) 以上の認識のもと、拙稿「『沈黙』する批評言語―戦時下の小林秀雄における歴史表象」(『日本近代文学』二〇二二・五 *刊行予定)では、小林における〈歴史〉と〈哀悼〉との主題的な結びつきを、その成立と展開に即して分析し、具体的なテキスト読解を行った。